1 イギリスでは絶対にはずせない パブを楽しむためのくだけた表現

◉まずは基本情報から

「いちばんイギリスらしいところはどこですか？」

こんな質問を実際にされたことはないのだが、こう問われたら迷わず「パブ（pub）ですね」と応えるだろう。

イギリスならばどこにでもあるパブ。古くはパブリック・ハウス（public house）といわれ、地域住民の集会場や簡易裁判所などとしても使われた社交場だ。そのパブでも新鮮な英語とは接することができる。

このパブ、日本の居酒屋のようなところだと考えてさしつかえない。が、昼間もオープンしてパブ・ランチ[*1]（pub lunch）を提供するところもあり、夕刻以降は逆に、ツマミがふんだんにない[*2]あたりは少し違うか。そこいらにいるごく普通の人が、ただただ飲みものを囲んで集（つど）うだけの場所だ。そこが面白く、イギリスで初めての都市を訪れて、ホテルにチェック・インするとまずは必ずパブに行くことにしている。レセプション（reception。日本でいう“フロント”は、英語ではこういう）で、

Is there any nice pub near by?（近辺にいいパブはある？）

などと訊けばたいていは教えてくれるものだ。

まあそんなことをしなくとも、聞くところによるとロンドンでは人口600人あたりに1軒のパブがあるらしい（20世紀後半の統計。ちなみにほかの地方都市では1,000人に1軒とのこと）。そのため街を歩けば簡単に見つけられるのだが。

そうして時にクロール（crawl）する。このクロール、水泳の型を表す言葉だが、こちらでは“ハシゴする”の意味も持っている。バーをそうすることはホップ（hop）。だからpub crawling、bar hopping（“パブのハシゴ”、“バーのハシゴ”の意味）という表現もあるのだが、イギリスでは、パブ好きは泳ぐようで、バー好きは飛び跳ねるようなイメージなのか。

初めてリヴァプール（Liverpool）に行った時、マシュー・ストリート（Mathew Street。ビートルズが60年代初頭によく演奏した『キャヴァーン・クラブ』［Cavern club］があるところ）周辺では、あらゆるパブでビートルズのナンバーが生バンドの演奏も含めて聴け、ほかのエリアのパブでも、レアなビートルズの肖像が見られるなどで興味深く、一晩で7軒のパブをクロールしたことがあった。

1. コテージ・パイ（cottage pie）とキドニー・パイ（kidney pie）が有名。どちらもポテトとビーフを使った（時にマトンが使われることも）パイで、ちょっと大味のため、個人的にはあまり好きではないのだが。
なお、昼時にはほかに簡単なサンドウィッチなどを提供するところもあり、中でクラブハウス・サンドウィッチ（clubhouse sandwich）がポピュラーだ。軽くトースト（toast。日本語ではそのまま“パン”をさすが、それを“焼く”の意味もある）したブレッド（bread。“パン”そのものは、こちらではたいていこれでいう）に、ベーコンやターキーと、トマト、レタスなど数種類の野菜をはさんでマヨネーズで味をつけた、ニューヨークの高級カジノ・クラブ発祥のサンドウィッチで、時にクラブ・サンドウィッチ（club sandwich）とも呼ばれるもの。このサンドウィッチはわりに好きで、かつてはよく食べた。ほか、パニーノ（panino）というイタリア風のサンドウィッチなども好まれている。
これらにはたいてい、イギリス人の好きなクリスプス（crisps、以下2.を参照）を添えて出されるところが面白い。
2. 一部をのぞいて、あるのはクリスプス程度。日本でいう、いわゆる袋入りのポテト・チップスのことだ。それの、食べ切りサイズの小さなものしか置いていないところも少なくない。ちなみにこの**crisps**という単語は“パリパリした”という意味も持っている。
関連して一つ。ご存知の方は多いだろうが、イギリス人の好きなポテトを揚げたもの、日本でいうフライド・ポテトは、イギリスではただチップス（chips）という。ちなみにアメリカではフレンチ・フライ（french fry）だ。
チップスには、塩とヴィネガー（酢のことだが、麦芽が原料の、モルト・ヴィネガー［malt vinegar］がこれには使われる）を大量にかけて食べるのがイギリス人の好み。
話はそれるがクロールに関して少し。パブにはそんなふうに、クリスプスぐらいしか置いていないため、クロールの途中、ホット・フード（hot food）の店で腹ごしらえするものがこちらでは多い。
ホット・フードとは、フィッシュ＆チップス（fish & chips。白身の魚のフライと、ポテトのフライ）が有名な、イギリス特有のジャンク・フード（junk food）のこと。ほかにもチーズ＆オニオン・パイ（cheese & onion pie。チーズとミンチした玉ネギのパイ）や、ジャケット・ポテト（jacket potato。皮つきのままグリルして、溶けるチーズなどをトッピングしたポテト）などがポピュラーだ。
これがどれも意外と美味で、初めて体験した時、「イギリスにはおいしいものがない」というものいいはウソだと思った。あまり高くなく、ヴォリュームも結構あるところも悪くない。少食の日本人にとっては充分に1食に匹敵するほどの量があり、個人的には昼食をこれだけで済ませることもよくあったりする。溶けるチーズをトッピングしたジャケット・ポテトに、タバスコ（tabasco）を大量にかけて食べるのが個人的には気に入っている。
軽食には、チェーンのファスト・フード・ショップのハンバーガーや、街角によくあるスタンドのホット・ドッグよりも、こちらを試すことをお勧めする。このホット・フードの店もパブと同様、簡単に見つけられる。
なおこのホット・フードは、匂いがあるため中で食べることを禁止している公共の乗り物がある。

2 レゲエが自然に流れる ブリクストンを探訪する

◉まずは街まで

ブリクストン（Brixton）はロンドン中心地からテームズ川（River Thames）の南側に位置する、ジャマイカ系移民（アフロ・カリビアン［Afro-Caribbean］としばしば呼ばれる。なおジャマイカの国名は、そのままJamaicaだ）が多く住む街。『ブリクストン・アカデミー』（Brixton Academy）という、ブリティッシュ・ロックのビッグ・ネームがよくコンサートを開くホールがあるため、名を知る方もいるだろう。市内を南北に走る地下鉄ヴィクトリア・ライン（Victoria Line）の南の終点にブリクストンという駅があり、移民街は駅のすぐ周辺から広がっている。中心地からは30 分程度で行けるところだ。

今はそうでもないが、90年前後までここの駅周囲の空気は少しばかり荒（すさ）んでいた。駅の地下から外に上がると、あまり身なりのよくない年輩の男から、

Only a few pence's OK.（ほんの数ペンスでいいんだ）

Spare cigarette.（タバコ、分けてくれ――“予備の”の意味のこのspare は、“与える”の意味にもなり、よくこの表現が使われている）

などと声をかけられることがしばしばあったのだ。

イギリスにはチップの習慣があるからか、わりと気前よく小銭やタバコ1本をわたすものが結構いたのは興味深かった。まあ、しつこく追いかけてくるようなものは当時からほとんどいなかったため、これは無視してもまったく大丈夫だ。個人的にもこうした輩（やから）はほとんど無視しているが、一度こんなことがあった。

……こういうものたちは多くが数枚のコインが入った紙コップを手に持って、それを揺すってジャラジャラ鳴らしながら道を行くものに声をかけている。かなり若い黒人の男からそんなふうにしながら小銭をせびられた時のことだ。

Why don't you get a job?（仕事すればどうだ？）

と少し顔をしかめながらいうと、相手は、

In this age? Quite tough, yeah.（こ時代に？すごく難しいんだぜ）

などとひどくラフに応えるだけ。それには、

I saw some "Clerks Wanted" signs in many places.（あちこちで“店員募集”の告知を見たよ）

と続けたのだが、彼は肩をすくめてただため息をつくばかりだ。見たところ健康そうで、より好みさえしなければそう難しくなく仕事は得られそうな青年だった。そのため、

Get more serious.（もっとマジになれよ）

とそれには返したもの。相手はまた肩をすくめるだけだったが、この時は10ペンスほど恵んでやった。

旅先で、そこに住むものを諭（さと）すというのもちょっと妙な話だが、こんなコミュニケーションは、日本ではまずできない。

◉治安について

そんな感じだから、治安は確かに市中心にある観光エリアほどいいとはいえない。記したような輩は今もいないことはないが、決して悪いというわけではない。だからあまり臆せずに、が、ほんの少しの緊張感を持てばこの街はほとんど問題なく楽しめるはずだ。

1. Why don't you ～は、“どうして～しないんだ？”という意味にもなるが、ここのように、“～したらどうだい？”といった感じの、何かを勧めるニュアンスで、以下のようによく使われるもの。
We gonna have a party this weekend at my place. Why don't you join us?（今週末、僕のところでパーティをやるんだけど、来ないかい？）
You've been keeping on working since yesterday without sleeping. Why don't you take a rest?（昨日から寝ずに働き続けだろう。ちょっと休んだらどうだ）
ビートルズのナンバーに「ホワイ・ドント・ユー・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード」（Why Don't You Do It In The Road）というのがある。“通りでやっちゃったらどうなんだ”といった意味か。
カジュアルな会話ではWhy not ～とラフにすることもあり、
Why not try more of this wine?（このワイン、もっと試してみたら？）
などともいう。
似たもので**Why don't we** ～という表現もある。こちらは“～しないか？”といった、Let's ～に近い、提案するようなニュアンスを持つもの。
I'm bit tired, so I don't want to cook. Why don't we eat out tonight?（ちょっと疲れたから料理はしたくないわ。今晩は外食にしない？）
The reputation of that newly opened Italian restaurant seems to be high. Why don't we go there before long?（あの新しくオープンしたイタリア料理の店の評判はいいみたいだね。近いうちに行ってみないか？）